

2) 業態別性別血圧平均値

次に血圧の平均値を業態別、性別に比較してみると最高血圧については35~39才までは生産者世帯の女子が最も高く、さらにこの世帯の女子は60~64才で159mmHg、65~69才で164mmHg、70才以上では171mmHgに達する。

一方、生産者世帯の男子と消費者世帯の女子は40才をこえて55~59才までは、ほぼ同じ上昇をたどるが60~64才になると生産者世帯の男子は上昇率が鈍化し消費者世帯は年令の増加とともに依然として直線的に上昇をつづけて65~69才で161mmHg、70才以上で169mmHgに達する。

最低血圧については業態別、性別に特に大きな相違はみられない。

8. 食 材 料 費

国民栄養調査でいう食材料費とは、摂取した全食品量について購入、自家生産、貰い物等の別を問わずすべて市場価格に換算して1人1日当りの平均を示したものである。

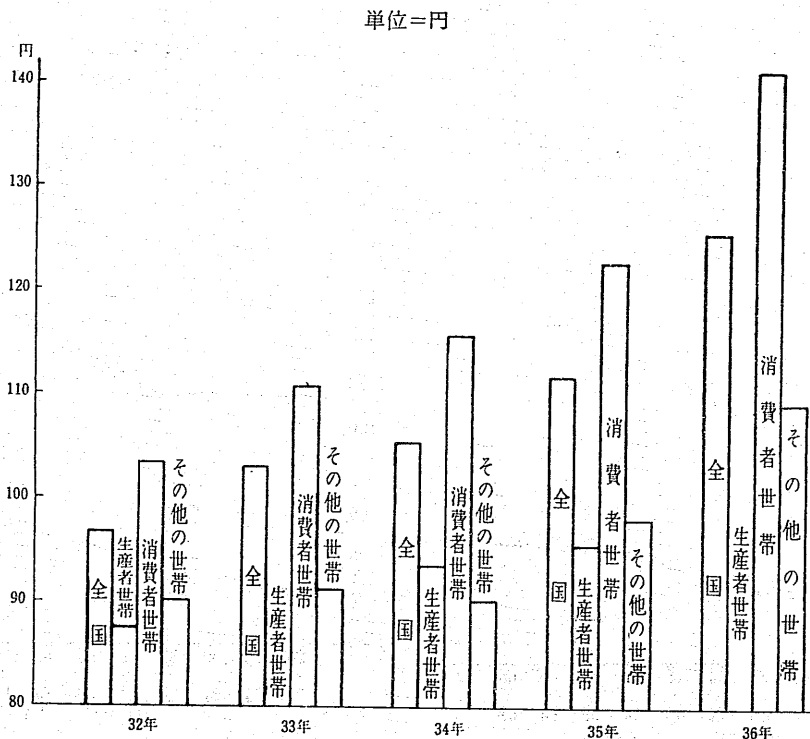
1) 昭和36年度調査による全国1人1日当りの食費は125,60円(うち動物性食品の入手に要した費用は36,01円)で前年の112,22円を11.9%大きく上回っている。

これは前年の上昇率6.2%を更に大きく上回る増加であってそのうち、動物性食品の費用は前年に比べ16.3%の伸びがみられる。

特に最近国民所得の増加に伴って国民の消費生活の経費もかさんでいるが、そのうち食材料費の増加の伸びは他の消費財の支出増加に比べて著しく劣っている。従って物価が値上りするとそれについていけない不安定な状態にあることは第24図に示すとおりである。

すなわち、食材料費についてこの数年の動向をみると、昭和32年度に比べて1人1日当りの食材料費は

第 20 図 1人1日当り食材料費年次推移



29.7%増加となっているが、この増加は必ずしも国民の食生活に対する関心が高まり食生活が豊かになった現われではなく、大部分はこの数年の物価の値上りにつれて上昇してきたものである。

また食材料費の支出増と実際に購入できた食品量を各食品群別に検討してみると最も物価値上りの影響をうけているのは野菜類で54.7%の支出増となっているにもかかわらず実際に入手できた量は4.4%の減少であり、また魚介類は27.7%の支出増で入手量は僅かに0.4%増と殆んど変わらない。

さらに穀類は13%の支出増で入手量は1.8%減少、豆類は10.1%の支出増で入手量は1.1%減少を示している。しかし、魚介類を除く動物性食品（肉、卵、乳類）とその他の果実類の支出増は最も大きく81.8%、55.7%であり入手量もまた70.7%、32.9%と比較的値上りの影響は少なく順調に伸びている。

次に36年度の1人1日当りの食材料費の総額中に占める食品群別の構成比をみると第32表のとおり穀類は30.6%で前年の33.4%を下回り、その他の食品では豆類4.9%で若干低くまた魚介類は13.4%で前年と変わらないが、肉、卵、乳類は15.3%で前年の14.2%を上回り、野菜類も11.1%と大幅な増加を示している。

なお、果実類も5.9%〜で前年の5.4%を僅かに上回っている。

2) 業態別1人1日当り食材料費

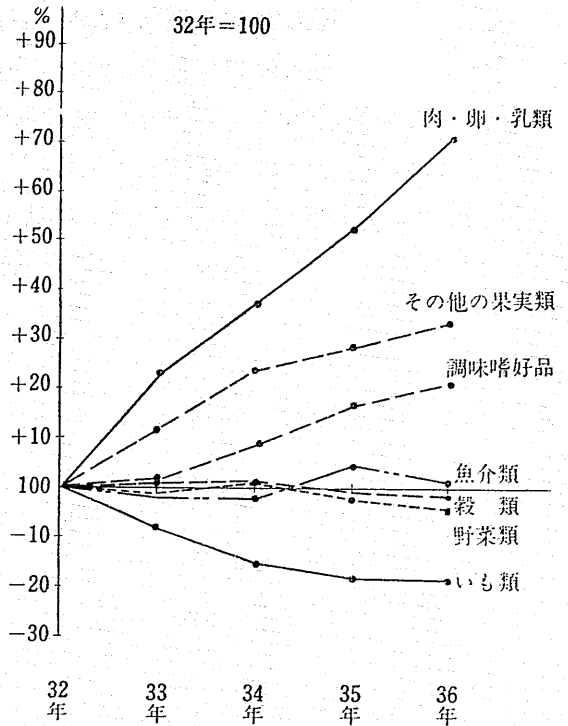
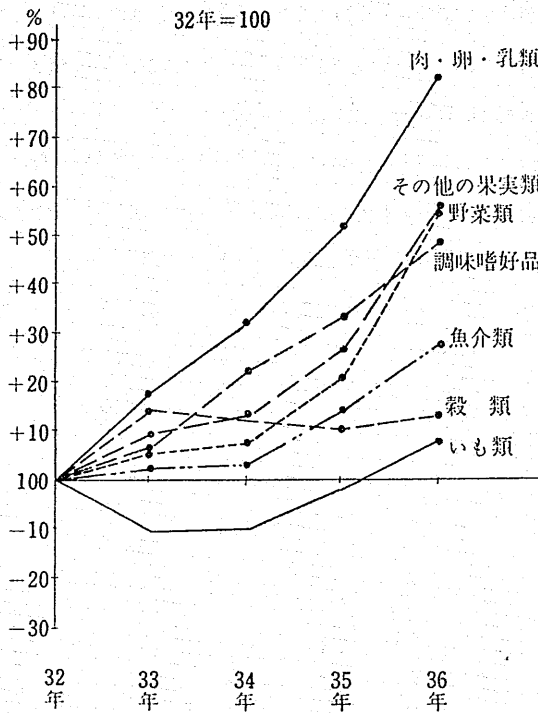
業態別に食材料費をみると消費者世帯が141.08円で最も高く前年に比べ14.9%増加しており、次いでその他の世帯が109.39円で11.5%増え最も低いのは生産者世帯105.91円で前年に比べ10.7%増となっている。この食材料費を昭和32年度に比較すると消費者世帯は総額で35.7%増、そのうち動物性食品は57.3%と大きく伸びているが生産者世帯は総額で20.8%動物性食品39.4%の増加であり、都市生活者を中心とする消費者世帯と自家生産物の依存度が高い生産者世帯の間には大きな格差が認められる、昭和36年度の経済白書によれば農村における電化製品等の耐久消費財、リクリエーション等の雑費の支出が急上昇していることが示されておることと考え合せると国民の消費生活のありかたを食生活の面で改めて反省する必要がある。

第 34 表 食 材 料 費 構 成 比

	金 額				構 成 比				対 前 年 比			
	全 国	生産者世帯	消費者世帯	その他の世帯	全 国	生産者世帯	消費者世帯	その他の世帯	全 国	生産者世帯	消費者世帯	その他の世帯
総 額	125.60	105.91	141.08	109.39	100.0	100.0	100.0	100.0	111.92	110.74	114.85	111.47
穀 類	38.43	39.68	37.76	36.08	30.6	37.5	26.8	33.0	102.53	104.72	100.63	104.21
い も 類	3.00	3.02	2.94	3.51	2.4	2.9	2.1	3.2	110.70	102.37	115.29	117.00
油 脂 類	1.94	1.24	2.48	1.48	1.5	1.2	1.8	1.4	107.18	97.63	114.81	110.44
豆 類	6.21	6.00	6.39	6.06	4.9	5.7	4.5	5.5	110.30	110.29	110.93	111.39
魚 介 類	16.84	13.20	19.46	16.51	13.4	12.5	13.8	15.1	111.81	114.38	114.06	111.70
肉・卵・乳	19.18	10.27	26.17	17.17	15.3	9.7	18.5	15.7	120.55	118.59	127.40	177.37
野 菜 類	14.00	12.87	14.91	12.98	11.1	12.2	10.6	11.9	196.35	176.54	210.89	189.76
果 実 類	7.45	5.08	9.38	4.71	5.9	4.8	6.6	4.3	122.53	127.95	126.24	106.56
調味嗜好品	14.28	11.06	16.77	12.30	11.4	10.4	11.9	11.2	111.73	113.08	114.86	110.41
醬 油	2.11	2.35	1.90	2.58	1.7	2.2	1.3	2.4	106.03	116.33	95.95	132.30
酒	3.29	2.61	3.81	2.95	2.6	2.5	2.7	2.7	111.52	110.12	114.07	131.69
菓 子	5.14	3.91	6.11	4.17	4.1	3.7	4.3	3.8	115.50	114.66	120.99	98.34
果 汁	0.64	0.22	0.98	0.21	0.5	0.2	0.7	0.2	142.22	115.78	158.06	95.45
そ の 他	3.10	1.97	3.97	2.39	2.5	1.9	2.8	2.2	105.44	110.05	109.97	95.98

第21図 1人1日当り食品群別食材料費年次推移

1人1日当り食品群別原食品 手量年次推移



(イ) 生産者世帯

生産者世帯の食材料費は105.91円で業態中最も低く全国平均からみても16%下回っている。対前年比をみると10.7%の増加がみられるが、これも全国平均11.9%の伸びにも及ばず、また、動物性食品の費用は23.47円で全国平均を34.8%も下回っている。

これを食品群別にみると、穀類の占める割合が他業態に比べて極めて大きく食材料費中37.5%を占めている。その他いも類は3.02円、豆類6.00円、野菜類12.87円でいずれも前年に比べて若干増加しているが、この伸びは他の業態に比べて小さく、この1~2年の物価の値上りを考慮すると実質的には原食品の入手量は前年を下回る状態にある。

(ロ) 消費者世帯

消費者世帯の食材料費は141.08円(うち動物性食品の入手に要した費用45.62円)で前年に比べ14.9%増加し生産者世帯に比べると33.2%上回っており、全業態中最も大きな伸びを示している。なお、食品群別に総額に対する割合をみると穀類は26.8%(36.76円)、で業態中最も低く、油脂類1.8%、肉、卵、乳類18.5%、果実類6.6%となっている。

次に5月調査における消費者世帯を細分した結果についてみると第35表のとおり、最も大きい伸びを示したのは事業経営者世帯で総額137.80円で前年に比べ15.5%と著しい増加を示し、そのうち動物性食品は43.59円で22.4%の増加を示している。

前年度に最も大きい伸びを示した常用勤労者世帯は総額で135.63円であり、前年に比べ9.9%の伸びにとどまったが動物性食品費は43.81円で全業態中最も高く、事業経営者世帯に比べて穀類は低いが油脂類、

第35表

1人1日当り食材料費および比率（消費者世帯細分36年5月）

		金 額				構 成 比			
		事業経営者世帯	常用勤労者世帯	日雇・家内労働者世帯	その他の消費者世帯	事業経営者世帯	常用勤労者世帯	日雇・家内労働者世帯	その他の消費者世帯
総額		137.80	135.63	106.47	124.12	100.0	100.0	100.0	100.0
穀類		39.18	36.58	38.24	37.05	28.4	27.0	35.9	29.9
いも類		2.33	2.27	2.48	2.07	1.7	1.7	2.3	1.7
油 脂 類		2.30	3.02	1.26	2.29	1.7	2.2	1.2	1.8
豆 類		5.98	5.54	7.44	5.81	4.3	4.1	7.0	4.7
魚 介 類		19.63	17.55	14.48	16.16	14.2	12.9	13.6	13.0
肉・卵・乳類		23.97	26.26	12.93	20.93	17.4	19.4	12.1	16.9
野 菜 類		12.25	13.59	11.28	12.01	8.9	10.0	10.6	9.7
果 実 類		7.16	7.80	2.81	7.08	5.2	5.8	2.6	5.7
そ の 他									

肉、卵、乳類、野菜、果実類の費用は高くなっている。

日雇・家内労働者世帯の食材料費は106.47円で前年に比べ10.7%増加しているが、消費者世帯中最も低く事業経営者世帯に比べて23%も下回っている。

そのうち穀類の占める割合は35.9%と高く、豆類も7.0%で消費者世帯中最も高いが、常用勤労者世帯に比べて油脂類は58.3%、肉、卵、乳類51%、果実類は64%も下回っており極めて低い食材料費となっている。

その他の消費者世帯の食費は124.12円で前年に比べ26.5%と全業態中最も大きい伸びを示したが消費者世帯の平均を12%下回っている、これを食品群別にみると最も大きく伸びているのは肉、卵、乳類で33.6%の増加となっている。

(ハ) その他の世帯

その他の世帯の食材料費は109.39円で前年に比べ11.5%の増加となっているが、全国平均を13%下回っている。

食品群別にみると前年に比べて穀類と果実類の費用は若干減少している以外は動物性食品、野菜類の費用は増加している。

9. 世帯別栄養摂取状況調査成績

国民栄養調査では各世帯毎の3日間の摂取量を各食品別に詳細に調査しているが、その集計に際してはこれを生産者世帯、消費者世帯、その他の世帯（5月調査に際しては、更に4業態に細分する）に分類して集計し、業態別成績或は全国成績として平均された形で示していた。

そのため、栄養状態のすぐれた世帯と劣った世帯のあることは、一般には予測されていても、果してどの位の世帯がこれに該当するかは明らかでなかった。

そこで昭和37年2月に実施した国民栄養調査の集計に当って新たに世帯単位の栄養摂取量の分布状態を明らかにするため、被調査世帯の中から無作為抽出によって、約1000世帯を抽出し、世帯毎に熱量、蛋白質の摂取量の計算を行うとともに、世帯人員別にみた栄養摂取量と3日間に摂取した食品数の集計を行なった。

なお、世帯の栄養摂取量は家族の性、年齢或は労働条件等によって差があるので、単に1人1日当りの